



Official journal of the
Japanese Society of Psychiatry and Neurology

Psychiatry and Clinical Neurosciences

PCN だより Vol. 72, No. 12

Psychiatry and Clinical Neurosciences, 72 (12) は、Regular Article が 2 本掲載されている。国内の論文は著者による日本語抄録を、海外の論文は PCN 編集委員会の監修による日本語抄録を紹介する。また併せて、PCN Field Editor による論文の意義についてのコメントを紹介する。

Regular Article

Delirium detection by a novel bispectral electroencephalography device in general hospital

G. Shinozaki*, A. C. Chan, N. A. Sparr, K. Zarei, L. N. Gaul, J. T. Heinzman, J. Robles, K. Yuki, T. J. Chronis, T. Ando, T. Wong, S. Sabbagh, M. T. Weckmann, S. Lee, T. Yamada, M. D. Karam, N. O. Noiseux, E. Shinozaki and J. W. Cromwell

*Departments of Psychiatry, University of Iowa Carver College of Medicine, Iowa City, USA

新規開発の二極脳波計を用いた総合病院におけるせん妄の検出

【目的】せん妄は高齢の入院患者に頻発し予後が悪いにもかかわらず、診断が見逃されがちであるため適切な治療に至らない傾向にある。本研究は、病院におけるせん妄のスクリーニングのため、治療現場で使用できる非侵襲的な携帯式二極脳波計 (bispectral electroencephalography : BSEEG) の診断特性を試験する

ことを目的とした。【方法】アイオワ大学病院に入院した患者について、臨床評価に加え、集中治療室用のせん妄の評価法である Confusion Assessment Method for Intensive Care Unit、および、せん妄評価尺度 (Delirium Rating Scale) によりせん妄評価を行った。その後、入院期間中に、携帯式 BSEEG を用いて 10 分間の脳波測定を行った。これらの患者のせん妄の有無を区別するためにパワースペクトル密度解析を行った。【結果】最初に 45 名の被験者をテストデータセットとして用いてカットオフを確立した。BSEEG 指数は、感度 80%、特異度 87.7% で、重要なせん妄の指標であると判断された。追加の独立した 24 名の患者の検証データセットでは、感度 83.3%、特異度 83.3% で、そのアプローチの妥当性が確認された。【結論】今回のパイロット研究で、BSEEG 法はせん妄患者と非せん妄患者を区別することができた。われわれのデータは、本技術による病院におけるせん妄のマススクリーニングの実現可能性を示した。

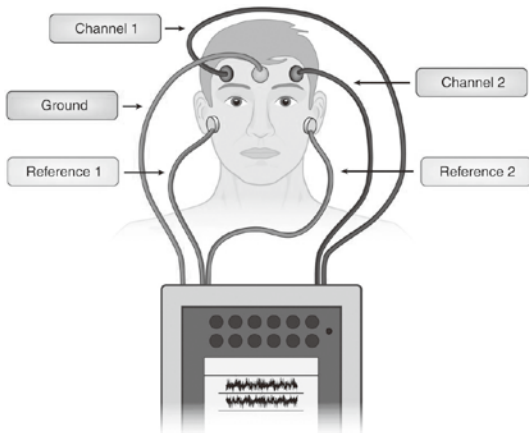


Figure 1 Location of five electrodes' placement. One lead is placed on the right and left sides of the forehead, respectively, to obtain two channels. One lead is placed on each earlobe as references. A fifth lead is placed on the center of the forehead as ground.

(出典：同論文，p.858)

■ Field Editor からのコメント

携帯式二極脳波計 (bispectral electroencephalography : BSEEG) を、せん妄の診断に応用した臨床研究です。今まで、せん妄を検出できる簡便なデバイスやバイオマーカーはありませんでしたが、本研究では、携帯式脳波計が、せん妄患者と非せん妄患者の鑑別において、感度、特異度ともに 80% を超える簡便で迅速な補助診断法であることが示唆されました。今後、精神科のみならず、せん妄の多い一般科においても、臨床への応用が期待される非常に重要な論文です。

Regular Article

Lacosamide in bipolar disorder : A 30-day comparison to a retrospective control group treated with other antiepileptics

I. Cuomo*, D. Piacentino, G. D. Kotzalidis, L. Lionetto and S. D. Filippis

*1. Department of Neuropsychiatry, Clinica Von Siebenthal Neuropsychiatric Hospital, Rome, 2. NES-MOS Department, School of Medicine and Psychology, Sapienza University, Rome, Italy

双極性障害治療における lacosamide : 過去に他の抗てんかん薬による治療を行った双極性障害患者を後方視的対照群とする 30 日間の治療効果の比較

【目的】抗てんかん薬は双極性障害 (BD) の治療に用いられることが多いが、BD の治療薬として、lacosamide はこれまで検討されてこなかった。てんかんのない BD 患者を対象に、単一医療施設においてその効果を評価した。【方法】研究期間中に急性 BD により研究実施施設に入院したすべての患者 102 名を、lacosamide 50~300 mg/日により治療した。これらの症例と、過去に他の抗てんかん薬 (OAE) により治療した症例とを比較した。投与開始後 3, 7, 15, 30 日の患者について、簡易精神症状評価尺度、ヤング躁病評価尺度、ハミルトンうつ病評価尺度、ハミルトン不安評価尺度、臨床全般印象度-重症度、機能の全体的評価尺度により評価した。【結果】Lacosamide 投与群は、研究登録時、OAE 投与群と比較して有意に若年で、混合エピソードが少なく、物質使用障害の併存も少なかった。両群とも、すべての測定値において有効性を示した。2 群のベースラインにおける臨床測定値に差はなかったが、3 日目以降、lacosamide 群のヤング躁病評価尺度、臨床全般印象度-重症度は OAE 投与群より改善し、ハミルトン不安評価尺度は悪化した。15 日目以降、OAE 患者の簡易精神症状評価尺度のスコアがより改善した。Lacosamide 群において、機能の全体的評価尺度のスコアが有意に改善した。年齢、物質使用障害の併存、エピソードの種類、教育水準は、結果に有意な影響を及ぼした。これらのパラメータ間の相互作用は認められなかった。【結論】Lacosamide は、短期的には精神病理、躁病、うつ病、不安の軽減、および双極 I 型/II 型障害患者の全体的機能の改善に有効で、副作用はほとんどみられなかった。Lacosamide は、てんかんに用いる場合より低用量で、OAE より躁病、臨床的重症度、全体的機能の改善に優れていた。

■ ■ Field Editor からのコメント

Lacosamide の双極性障害に対する治療効果を検討した研究です。入院中の双極性障害患者（I/II型）に 50~300 mg/日の lacosamide を 30 日間投与した lacosamide 治療群と、過去に他の（すでに有効性が知られている）抗てんかん薬で治療された 123 名の retrospective sample を対照群として比較検討しています。その結果、対照群と比較して lacosamide 治療群では、投与開始後の早い段階で、躁状態や不安、疾病全般の重症度の有意な改善を認め、一方で重度な副作用は認めませんでした。今後、prospective study によるさらに詳細な検討が必要ですが、lacosamide が（てんかん治療時に比べ）比較的低用量で、双極性障害の症状を改善する可能性を示したとても興味深い論文といえるでしょう。

■ Psychiatry and Clinical Neurosciences

Vol. 73, No. 3-4 表紙の作品解説

車がびっしりと描きこまれている。車と車の間の距離は、横方向にはゼロだ（でも、事故を起こしているようには見えない）。それに対して、前後方向には結構余裕がある。これはきっと、フロントグリルかテールランプを描くためだろう。つまりこの絵の作者は、それぞれの車のアイデンティティをきちんと表現しようとしているのである。

この絵はいわゆる鳥瞰図だ。また、本来 90 度で直交している建物の角が 120 度で描かれている点では、建築設計で用いられるアイソメトリック図でもある。となると、作者の目的は、現実世界を広く見渡して客観的に記録することとなりそうなものだが、そうではない。日本の都市であればそこそこにある看板は一切省かれているし、電柱や電線に本来あるはずの変圧器や碍子も、ない。

見逃してならないのは、シンプルな直線となった電柱と電線が、画面を分割しながら、繊細なリズムを生み出している点だ。こうしたリズムのなかで、車のアイデンティティが表現されていればこそ、たとえそこに人がいなくても、車が走っているように見えなくても、この絵からはいきいきとした感じが伝わってくるのである。

戸舎は 1969 年生まれ、鳥根県出雲市在住。絵を始めた中学生の頃には人間も描いていたようだが、近年はまったく描かない。彼の作品は、職場へと通う際にバスから見える風景に基づいているという。制作の際には定規を用いる。下絵は描かず、隅から描き始め、素早く画面を埋めていく。

(保坂健二郎, 東京国立近代美術館)



タイトル：街と車のある風景

作者：戸舎清志

制作年：1992 年

素材：紙、ボールペン

サイズ：420×566 mm